

科学技術政策担当大臣と有識者議員との会合 議事概要

- 日 時 平成 22 年 10 月 14 日（木）11：00～11：30
- 場 所 合同庁舎 4 号館第 3 特別会議室
- 出席者 相澤議員、奥村議員、白石議員、今榮議員、青木議員、中鉢議員、金澤議員、
泉統括官、梶田審議官、岩瀬審議官、大石審議官
- 議事概要

議題 1．総合科学技術会議有識者議員と日本学術会議会長、副会長との意見交換会について

<大竹参事官説明>

- 金澤議員 先日、総合科学技術会議の先生方の中でのご議論の結果をメールで拝見いたしまして、なぜ学術会議の会長が人文・社会科学研究の今後の推進の在り方についてなんていうタイトルを持ち出すのかというご意見があったということを伺って、ああ、そういうものかなと思って拝見しました。それは、ある意味ではこういうことをやるときの入り口に相当しますので、少しだけご説明したほうがいいんじゃないかと思うのですが。

要するに、直近でいいますと、前回、1 カ月ほど前でしたでしょうか、もう少し前かな、学術会議から勧告を出しまして、その中にぜひ科学的な今後の日本の方向を決めるこの会にも人文・社会科学の部分をぜひ取り入れてほしいという思いを込めて、科学技術基本法を見直してほしいということを行ったわけですね。それは非常に直近な話なのですが、もともと、人文・社会科学には余りお金を投入しなくてもいいのではないかなというような感覚が一部に根強くあることは承知しておりますし、また、そういうことを考慮に入れて、文部科学省なり何なりでのさまざまな会でも科学技術学術分科会でも、人文・社会科学は大事なのだということは常に言われているわけです。ところが、言葉は悪いけれども、お題目になってしまっていて、具体的にそれでは何をやれば彼らの研究が進み、かつ希望を持って研究を進め、人を育ててくれるのかということに関しての具体策に関してはかなりあいまいなところが残っているように思うのですね。

日本の大学の、これは改めて言うこともないのですが、ほとんど 7 割近くは人文・社会科学系の学生を育てているわけです。ですから、そういう点から考えても、しかも、省庁の重要ポストの人たちも、かなりの人たちが人文・社会系で育っているわけです。そういうことを考えたときに、今こそ人文・社会系の教育、研究を本当の意味で充実させておかないと、それこそ 20 年先、30 年先が思いやられるというのが明らかなように私たちは思うのですね。そういうことを常に考えている、我々はそういうグループなものですから、そう考えています。

その一つのあらわれとして、大変うれしく思いましたのは、大型研究施設あるいは大規模研究プラン、そういうものを求めましたところ、人文・社会科学系からも三つほど大きなテーマが出てきました。しかも、そのうちの一部はもう文部科学省で取り上げていただいたと聞いておりますが。そういう時代に入ったのではないかと思うのですね。

ですから、そろそろ具体的にこの人文・社会科学系の研究をむしろ言うならば、これに教育を含めたほうがいいのかもしれないのですけれども、具体論をそろそろ本気で考えてもらいたいというのが、テーマとして取り上げた理由です。ご理解いただければと思うのですが。

○相澤議員 ただいまの点がこの次の意見交換会では大変重要なテーマでありますので、ぜひ、なぜこれを議題とするかというところの理解を含めて、いろいろとご意見を出していただければと思います。

○今榮議員 私は常々この人文・社会系と、それから理系がどこかで共同作業をするような場所が必要であるというふうに思っているのですが、多分大きな問題は、今の組織ですとかなり縦割りになっていて、学部が分かれていて、なかなかどういう場で例えば共同的な研究をするかとか、組織的に融合できるか、そこが大学の今の学部的なものからするとなかなかそのボーンを見つけることは難しいということです。そこをどう打開するかということがあるかと思います。

○金澤議員 今の今榮さんのお話で思い出したことがあるので。私は、例えば具体的なこと何を考えているのかということの一つだけ申しますと、科学研究費の申請などにしても、やはり理系を中心に考えちゃうのですね。例えば大型の予算とか、それがいいものなのだというような前提で始まるわけですよ。それははっきり言って全体から見ると間違いだと思えます。それは、例えば年間30万円でも50万円でも人文・社会系のある種の研究は進むわけですね。例えば東大の例を出しますと、いつでしたかね、総長補佐をやっていたときに、理系で大体学部で何億円という、年間に数億円以上使わないと研究は進まない、あるいは業績が進まないときに、文学部は年間2,000万円あれば十分できますということと言われたことがあるのですね。そういう感覚というのをやはり、例えば研究費のアプリケーションにしても、やはり考慮に入れないといけないのではないかなと思うのですね。具体的にというのは例えばそういうことです。

ですから、もちろん人文・社会系の方々にも注文はあるのです。それは、もう少し群れてもらいたいというか、一匹狼ではなくて、共同的にいろいろなことをやってもらいたいと思うのですけれどもね。それはそれとして、やはり我々がやることはあるのではないかなというように思うから、申し上げています。

○白石議員 実は火曜日にどうしてこういうテーマが出るかと聞いたのは私なのですからね。問題意識は実は金澤先生と全く同じなのです。それで逆に、私は科学技術政策の中に入ると、ますます理系の例えばファンディングの方式やなんか人文・社会科学系が吸収されていって、それでますます実は難しくなるのではないかと。むしろ非常にはっきり切り離していただいたほうがいいのではないかなというのが実は私の正直な感じなのです。

それはどういうことかと申しますと、1つは確かに額なのです。私今までほぼずっともらっていますけれども、3年で、2,000万円以下で、それで5人ぐらいでやって十分なのです。そのくらいでやるのですね。

それから、もう1つは、群れて欲しいというように先生言われましたけれども、我々の世界で群れると評価というのは余りよくないのですね。むしろ特に、これは経済と政治でも随分違うのですけれども、我々の世界ですと本何冊の世界ですので、論文集というのはほとんど評価されないのですね。ですから、学問の評価の仕方だとか、お金だとか、随分違うので、余り全部一緒にすると、逆に不都合が出てくるのではないかなという気がするというのが、実は私の率直な考えです。

○金澤議員 反論ではないのですけれども、群れて欲しいと言ったのは、他人の意見を聞いて欲しいというだけの話なのです。

それはそれとして、今のは、ものすごく大事な議論で、前半におっしゃったことは、私は日本学術会議と総合科学技術会議の一緒に会議だからなのです。その場でしか恐らくチャンスがないだろうと思うから申し上げているのです。つまり、今の段階では、この総合科学技術会議では大学全体のことだとかそういうこと、あるいは科学研究費の本当の在り方であるとか、そういうことをストレートに議論する場ではないのですよね。ですから、学術会議等のせっきくのインフォーマルの会ですので、ぜひ議論してほしいと思ったから申し上げたのです。

○相澤議員 まず、この人文・社会科学系との関連については、どの程度の距離感でこの問題を意識されるかということで、議論の進め方が随分違うかと思うのですが、今、人文系からのお話がありましたが、青木先生は両者にまたがっているという立場もあるかと思うのですが。

○青木議員 私が今までの議論に加えることがあるかどうかかわからないのですけれども、白石先生がおっしゃったように、少し社会科学でも立場が違うというところもあって、私はどちらかというところ、科学技術の科学にやはり人文・社会科学も入るので、分析能力とかそういうのは、特に問題解決型になると貢献するところがあるので、もっと一緒にして扱って欲しいと個人的には思います。

確かに評価の仕方が違うので苦労するというのは、それはもう、政治学の人と一緒に何かやろうと思った途端に出て行くのはよくわかるのですけれども、そのときにいつも思うのは、各学問の人たちが、1つは自分たちの評価能力はきちんとあるのだということとを他分野にきちんとコンビンスできるだけの評価体制を持っていなければいけないということと。お互いのコミュニケーションの場が、これは今榮先生がおっしゃったのに通じるのですけれども、その場が少なくともあればいいなと思いますので。

今回日本学術会議と一緒に議論できるのはプラスにしかならないと思います。

○中鉢議員 今、文理統合型というと、文というときには社会・人文科学を言い、理というのはいわゆる総合科学みたいなものと言うと思いますが、ほどよいかほどよくないかは、いろいろ議論はあって、カンフォタブルなゾーンなのかどうかというのはともかくとして、そういうものは進んでいると思います。改めてもっとつき合えと言われると少し違和感があります。改めて何を今やって、それで何を確認するのだろうか。重要性というのは非常に敬意を払っています、人文科学というものに対して。しかも、自然科学の問題が、今いわゆる従来型の、要するに自然、ネイチャーを相手にして利便に資すると、そういうことの限界というものも感じていて、今こそ人文・社会科学者の力も借りたいという空気になっていると思います。そういうことに対していろいろなブレーキがかかっていると思います。倫理的な側面、政治哲学的な側面とか、いろいろなところで自然科学に対するけん制というのがあります。今この時期に何が喫緊の課題なのだろうか。どこかにフラストレーションがあるのだろうかということであれば、もう少しフォーカスしないと、何をこれから一緒にやるのかなという感じがいたしました。

○相澤議員 ここでその都度金澤議員に答えをということではなかなか難しいのですがね。金澤議員もこれで少しおわかりいただけたかと思うのですが。つまり、この議題のとらえ方について、少し皆さん距離感があるのです。それで、その意味で、白石議員が先週発言された内容は、ある極端なフェーズから考えればということとそういう発言をされた。ただ、こうやって意見が出てくると、この議題のとらえ方が非常に多様であると。

そこで、もう少し近くに寄せるような、今、中鉢議員が何をこのところで喫緊にこうすべき、あるいはこういう方向にいきいたいとかという、そういうような新たなインパクトのある、そういうようなことがおありでしょうか。

- 金澤議員 いや、別に頑固なつもりはないのですが、余り変えるつもりもないのですけれどもね。つまり、今までの議論を聞いておりますと、ここでの議論です。さまざまなご意見があることも承知しているわけですが、ただやはり、私たちとして、学術会議として今考えていることのかなりな重要なところにこの人文・社会科学系の研究あるいは教育というものの位置づけがあるので、それを皆さん方にぜひ知っていただきたいというのが実はベースにあるのです。ですから、今のようなご意見は大変ありがたいのです。つまり、これに対する反論をいたします、必ず。多分そういうことになると思います。

- 中鉢議員 他人の意見を聞くというのは、これは非常に重要なことだと思います。ただ、総合科学技術会議にとって他人というのは何だろうかと考えた時、私は日本学術会議というのは他人ではないと思っています。私はたまたま今産業界、経団連を代表していますが、経団連は他人ではありません。産業界の声も出てきますので、経団連ともっと群れてよというのはあるのかもしれませんが、軽んじて近寄らずみたいなのところも一方ではあるという印象も持っています。学術会議はいろいろあるのかもしれませんが。

先般勧告のときにご説明があったように、日本学術会議というのは、総理大臣に対して、唯一の公式の科学者コミュニティーの組織であるということからすると、この総合科学技術会議というのは蛇道ではないかと。これは今の流れで言うと、なぜ唯一でないところで本論を議論している、しかも、人文・社会科学を除くという非常に制約されたところで議論しているではないか、しかも、自然科学の進歩主義の破綻が見えているにもかかわらず、相変わらずまた進歩主義を、前世紀の発展型の成長をとらえようとしていると。これについて物申さねばならないということは、世界の風潮でもあって、そういう人たちがノーベル賞をいただくなど、今世界的に評価されているのではないかと思います。

こういう状況の中で、重要性はわかるのですが、重要性と緊急性、そういうものの中で、議題をもっと明確にすべきではないかと思います。例えば第4期に対して言うならば、第4期のこのところが気に食わない、おかしいではないか、ということはこのプロセスの中でやるべきではないかと私は思います。

- 相澤議員 そのことは今までの第4期の検討の中でもいろいろと出てきたわけだと思います。それで、現在の総合科学技術会議のスタンスとしては、必要などころには特記して、人文・社会科学の分野からの参画を大いに求めるというようなことを要所要所に明記しているわけですね。ですから、それ以上に何かもっと人文・社会科学に対する対処というものを具体的に何か、仕組みとかその他のところで突破しなきゃいけないことがあるのかどうか、というようなことが1つのところですね。

それから、もう1つは、この第4期の検討してきたプロセスの中で、科学と技術というこの用語の取り扱い、この議論がいろいろ発展して、科学というところと、学術という言葉のこの表現のところの取り扱い、これの議論もありました。その学術という場合には、人文・社会科学が十分に取り込まれたテリトリーとしての取り扱いということがいろいろとあります。

そういうようなことで、具体的にこの時点で何をどういう形で議論したらいいのかというのが、先ほど来のように、多少まだ距離があるのかなというところがあるので、今日こういう機会にいろいろと意見交換しておく、今日の議論が進むのではないかと思います。

うのですが。

金澤議員にここの段階でお伺いしたいのは、まさしくこの第4期も含めてなのですけども、一步何々を進めるべしというような具体的なところが何かありますかのかなのですね。そういうような考え方の意見交換ということをするればいいということであるのか、あるいはもう一歩進んでということまでかということなののですが。

- 金澤議員 私は今までの例でいきますと、まさに意見交換以外ないのだろうと思っていましたから、皆さん方のご意見を伺って、こちらの意見も聞いてもらって、相互理解を深めると、それ以上には期待をしておりますけれども。だから、何かここを新しく何か議論しろという場ではないと実は理解をしているのですが。

ですから、正確に言いますと、例えば第4期の最近の状況については、きちんとした議論をしなくてはいけないので、ここでは余り言うつもりはない。むしろこういうところで言わせていただきたいのです。科学技術についての用語の使い方にしても。

- 相澤議員 この機会に何か学術会議との連携等について、こうあるべきだとか、それから組織の在り方について、ご意見等ありましたらば、出していただければ、これからもこの意見交換会は続きますので、次の時点ではこういうことを検討しようとか、そういうことに参考にさせていただきたいと思います。

- 中鉢議員 テーマの例が幾つかございまして、最初は人文・社会科学研究の今後の推進、次の第2番目のテーマは、いわゆる狭義の自然科学の話、第4期の話題、自然科学の今後の推進、その他、こういう理解でよろしいですか。

- 相澤議員 これはたまたま直近の問題がこういうところにあらわれているのでということでの議題抽出です。ですから、2番目が狭義の自然科学という捉え方ではなく、先ほど私が申しましたように、両方とも学術会議側の多分ご意向としては、先ほどの人文・社会科学のかかわり方、それから第4期のほうのところでは基礎研究とか、あるいは科学・技術と言っているその位置づけ等について、今まで随分ご意見をいただいているわけです。それを第4期ということで特化してこの中で議論をということで。多分金澤議員が言われていることは、両方とも対象となることは共通しているのではないかということではないかと思うのですが。

- 金澤議員 なるほど。今までお話を伺っていて、第4期についても内容について意見交換を、少しはみ出すかもしれないけれども、その場で議論というのも悪くはないなと思って今伺っていました。というのは、私の意見しかここでは反映できないのですね。ところが、副会長の意見というのも当然ながらあるわけで、多分余り私と変わらないのではないかとはいえますけれども、しかし、それでもそれぞれ意見がとおりでしょうから、その場で出していただいて結構だと思います。

科学・技術というのと、それからもう1つは、科学・技術・イノベーションの話もございしますので、その場で出していただきましょう。それで、そこで議論しましょう。結構です。

- 相澤議員 それでは、10月19日に意見交換会を開催いたしますので、ご出席いただき、そして積極的に意見交換を進めていただきたいと思います。

(以 上)